

「主に不可能なことがあるか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている(創世 18:14)」。人間の謎めいた誕生に際して、神は御自分の全能を表明される。キリスト降誕の時もそうであった。

懐胎を告げられると(ルカ 1:31)、マリアは「どうして、そんなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに(1:34)」と答え、天使は「神にできないことは何一つない(1:37)」と語っている。創世記の「主に不可能なことがあるか」と響き合う。

マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように(1:38)」と受け入れ、サラは主の告知を信じずに冷笑した(創世 18:12)。

サラは冷笑を指摘されると恐くなり、しらばっくれた(18:15)。サラから生まれたイサクはアブラハムの後継者だが(21:3)、イエスは誰の後継者なのか。

天使は「神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない(ルカ 1:32~33)」と告げた。ユダヤの伝統的なメシア(救世主)は「ダビデの裔」からと考えられていたのでその系は一応頷ける。そして天使は、いっそう重要な別の流れについても語る。

「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる(1:35)」。待ち焦がれている「ダビデの子」とは別の、人間の何事をも超える聖霊による「神の子」の誕生。

ルカ福音書は、伝統的なメシア像を表明しつつも、それを凌駕する救いに軸足を置いている。救い主の降誕は、人間の肉によるものではなく(1:34)、神の霊によるものなのだ(1:35)、と。

福音書の編纂以前、パウロは「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた(ロマ 1:3~4)」と記している。だが福音書は聖霊による受胎を強調するあまり、人間の肉の継承を断絶した(ルカ 3:23)。

ルカ福音書は、マタイ福音書と違って父ヨセフの働きをほとんど著さず、マリアが一人ですべてのことを引き受けているように語る。これはどういうことなのか。

ナザレもしくはガリラヤからメシアが現れるはずがない(ヨハネ 1:46,7:41)とされていた辺境の町で(ルカ 1:26)、十代の物知らぬ少女が、途方もない神の計画をたった一人で担っていく。

徹底して人間の力ではない、世の基準を遥かに超えている、神の御手が暗示されている。

素朴なマリアが、男の庇護なく一人で子を産む決意をする。天使の第一声は「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる(ルカ 1:28)」。

家や社会制度からはじき出され、「主と共におられる」ことを唯一頼みにした少女。伝統的な庇護や権威から離れ、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように(138)」と自らを献げた。その孤独な献身に「あめでとう」と天使は言った。

「兄弟たち～自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げなさい(ロマ 12:1)」。その第一の手本がマリアではないか。

生活費全て(百円くらい)を献金した貧しいやもめ(ルカ 21:4)、全財産であろう高価な香油をイエスの頭に注いだ女(マルコ 14:3)など、彼女らは自らを「聖なるいけにえ」として献げた。

パウロは「兄弟たち」と呼びかけたのだが、それを為したのは総じて「姉妹たち」であった。



#### 《おまけのひとこと》

女之力 無力という力 見通しや計画を立てられる所に無力は 無い 有力の端っこにしがみつくの  
がせいぜいだ 本当は 有力にも無力があるのだけれども 有力が邪魔して無力を手放している